

我ら 50 期 ここにあり



積小為大(せきしょうだい) ～二宮 尊徳～

「大事をなさんと欲せば、小なる事をおこたらず、勤しむべし、小積もりて大となればなり」これは、二宮尊徳(二宮金次郎)の言葉です。「小さいことが積み重なって大きな事になる。だから、大きな事を成し遂げようと思うなら、小さい事をおろそかにしてはいけない」という意味です。二宮金次郎は、江戸時代、小田原(神奈川県)近くの村の農民の子として生まれました。金次郎は、朝暗いうちから夜遅くまで、汗と泥にまみれて一生懸命に働きました。勉強が好きで、余裕ができればわずかな時間も無駄にしないで勉強をしました。文字を学ぶため、箱に砂を入れ、棒で書いては消すということを繰り返したと伝えられています。貧しかった金次郎ですが、荒れ地を耕して米を作り、余ったお米をお金に換え、お金が貯まると土地を買うことを繰り返し、23 歳の若さで立派な土地持ちとなりました。金次郎は一生を世の中のためにささげ、大ききんで困っていた関東や東北の多くの農村や藩のために働き、多くの人々を救ったということです。二宮金次郎は、「一生懸命努力する」「働くことを惜しまない」等、日本人が大切にしている姿をたくさん持っていた人なので、一生懸命勉強し、家庭の仕事を手伝い、より良い生活を目指す人間として少年時代の薪(たきぎ)を背負い歩きながら読書する姿は、1945 年よりも前に創られた学校には必ずと言ってよいほど金次郎の石像があったことで有名です。日本で世のため人のために力を尽くした人は沢山いるわけですが、その人々の中で、誰が一番優れているかといえば支障があるかもしれませんが、落ち着くところは二宮金次郎ではないかと思います。聖徳太子や幕末や明治維新の志士など、その他あげればきりがありませんが、尊徳は一個の平民として終始し、さらには一人の農民として終始した偉人なのです。社会的地位や身分に関係なく志を支えに身を起こし、終生その位置にとどまり誰にでもわかるような、よりよく生きる手がかりを示してくれた偉人として、他に類をみないでしょう。



創造的休暇 ～リンゴが教えてくれたこと～

アイザック・ニュートンを知っていますか？力の大きさの単位を表すときに使われる、N(ニュートン)は彼の名前にちなんでつけられました。彼の功績としてニュートン力学、万有引力の法則だけでなく、微分積分学や光学などがあります。ニュートンは 1643 年に英国で生まれ、1661 年にケンブリッジ大学に入りました。その学生時代にロンドンでペストが流行し、ケンブリッジ大学が休校に追い込まれました。ペストとはペスト菌の感染によって起こる感染症で、症状が激しく致死率も高く、当時世界的に大流行しました。この時も今と同様に人との接触をおさえるためにあらゆる活動を自粛する策がとられました。そこでニュートンもペストを避けて、1655 年から 1656 年(18 ヶ月)の間、故郷のウールスソープに戻りました。ニュートンはここで一人でじっくりと思案を巡らす時間ができたのです。大学で彼が学ばなければならなかったことから解放され、故郷に戻ることで、すでに得ていた着想について、自由に思考する時間を得たのです。「リンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則に気付いた」という有名な伝説は、ここで生まれました。ニュートンの業績はすべてこの時期になされたと言われているようです。そのため故郷に戻っていたこの期間は「ニュートンの創造的休暇」と言われるようになったのです。ニュートンは近世を中世から切り離れた画期的な研究者、という評価を生みました。さて、この話を聞いて、みなさんはどう感じたでしょうか？普段、学校での授業や部活、習い事で慌ただしい毎日を送っていたことと思います。未来のあなたを助ける人は今のあなたです。

強制的にさせられる努力はもろい

学校で、あるはずの正解にいかにも速く到達するかばかり考えていると、「答えがない状態」に直面した時、どうしたらいいかわからなくなるといものから創造する音楽・美術などの芸術家は言う。義務としてなす努力はついついのも早い。努力は遊びとして楽しむような部分がないと、いざというときに生きてこない。結果を考えず、「向う見ずにやってしまうと、日頃そっぽを向いていた他人も力を貸してくれるもの」とも言う。どうせやるなら自分から、同じやるなら自分からする「努力」を是非ともかってでもしてほしい。